〔富岡鉄斎展によせて〕

鉄斎の富士図―新収品攀嶽全景図を中心に―

鉄斎は富士図を好んで描きましたが、それは彼が先達として尊敬する江戸時代の教養人や文人画家たちが富士に強い関心を寄せ、紀行文や富士の絵を残したことに大きな影響を受けています。

鉄斎が実際に富士登山したのは、明治８年の一度で、甲府を経て、山梨県吉田村から登り、７月18日に八合目の石室で一泊、翌19日に寒さと悪路に苦しみながらも登頂を果たしました。その事情は鉄斎自身が記した『信濃浪合及登嶽記』等から知られますが、幸い天候にも恵まれ、頂上からは大島、伊豆の島々、筑波山、浅間山、駒ケ岳などの眺望を得、また鉢回りを行ない、つぶさに山頂部の様子を鉄斎は実見したのです。そして南面を下り、後日再び甲府へ出ました。

このとき鉄斎は数え40歳でしたが、彼がのちに多数制作した富嶽図の原点は、この実体験にあるといえます。それは、鉄斎が富士図において山頂部の描写にこだわることからもわかります。

例えば、彼の代表作として有名な「富士山図屏風」六曲一双（明治31年・63歳作、清荒神清澄寺蔵）は、一隻は富士の全景で、もう一隻は“不尽山頂全図”と自題にあるように頂上部の荒々しい景色を六扇いっぱいに大きく描いて秀麗な姿の富士と対比しています。

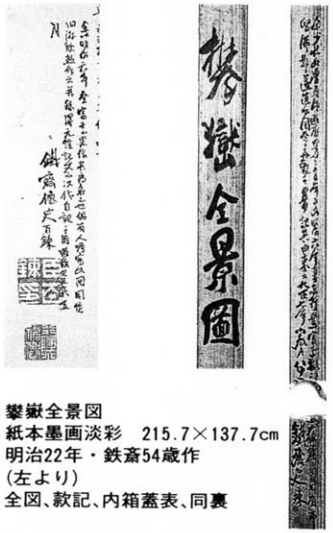
ここで紹介する「攀嶽全景図」も、山頂部分の描写に特徴があり、その頂上部分は一般的な富士図とはことなり、遠望による整った形ではなく、近視した克明な描写が採られています。いわば全景に頂上の部分図をはめ込んだような特異な図といえ、先の屏風絵の二隻分を一つに描いていると見ることもできます。

さて、この大幅は三重箱に収められ、内箱蓋表には「攀嶽全景図」という題が鉄斎によって大書され、蓋裏にはこの絵の由来が彼自身によって述べられています。そこで、「大正七年小春月、八十又三叟鉄斎外史百錬」（印は「富岡百錬」白文方印と「画禅斎」白文方印の２印）とあるように、この箱書は大正７年、鉄斎83歳のもので、少壮のころ師を尋ねて諸国を遍歴し、明治６年には富士登山の後、甲府に滞留してこの図様を描いた。今日再びこの絵を見たのでその由来を記す、とあります。

この箱書の文章は、おそらく図上の自識に基づいて書かれたものでしょう。というのは鉄斎の富士登山は明治６年ではなく、正しくは先述のように明治８年で、図中の誤った記述をそのまま写しているからです。こうしたそそっかしい間違いは鉄斎にはよくあることで、例えばこの図と同じく明治22年５月に描いた「富士山頂上図」（個人蔵）では、明治７年に登ったと記しています。

図中、長文の賛より一段低い款記には、「明治己丑歳五月」とあり、明治22年５月の作とわかります。落款は「鉄斎僊史百錬」で、印章は関防が「帝道唯弋」白文長方印、款記の終わりに捺された２印は「臣百錬印」白文方印と「行地小神僊」白文方印です。

ところで鉄斎は「自分の絵を見るときはまず賛を見てくれ。」と言っていたといわれるように、彼の絵を理解するうえで、その賛文は重要な意味を持ちます。さらに落款と印章にも注意を向ける必要があります。それは制作時期を知る手がかりとなるだけでなく、彼がどのような態度でその絵を制作したかを示しています。彼の本名は百錬で、鉄斎は号ですから、謹厳な内容の図を描いたときには百錬を用いる場合が普通です。この作品は百錬を款記だけでなく、晩年の箱書にも用いており、襟を正して描いた図であることがわかります。この推測は使用印が、「帝道唯弋」「臣百錬印」であることによっても裏付けられます。鉄斎は幕末維新以来、勤皇思想を堅持し、神官を務めたこともあるように、神国日本や天皇を賛美する作品を多く残しています。この図も神国の象徴としての富士を描き、単なる富士図ではないことが鉄斎の款記印章からも裏付けられます。なおこの二印は先述の富士山図屏風でも用いられています。



攀嶽全景図
紙本墨画淡彩　215.7×137.7cm
明治22年・鉄斎54歳作
（左より）
全図、款記、内箱蓋表、同裏

では、次に賛文を見てみましょう。款記に沢元愷の記を録したとあるように、これは江戸時代の漢学者で諸国を遊歴し紀行文を著した平沢元愷（号旭山。享保18年生、寛政３年没。1733～91年）の『漫遊文草』（寛政元年刊）中の一編「登富士山記」です。これは、明和６年（1769）７月の登山記で、全文で1200字余りの漢文ですが、鉄斎はそのまま書写しています。この書は広く読まれて、明治になっても版を重ね、とくにこの一編は有名でした。

文章のほとんどは淡々とした記録文ですが、末尾で富嶽を讃えて、話が天皇に及び、“独り我が天皇万古一姓、革命有るなし。是れ無疆の鎮。云々”で終わります。鉄斎は旭山の「登富士山記」に対して、富嶽登頂の体験者として共感する点が大きかったのでしょうが、それに加えて天皇を富士になぞらえ賛美していることに同調し、それゆえ自分の絵の賛文として引用したのだと考えられます。

鉄斎にとって富士山は特別な存在でした。現代人も富士に対しては聖性を感じ、日本一高い山以上の敬意を無意識的に示しますが、幕末明治に生きた鉄斎はより積極的に富士の霊峰としての意義を認め、その姿を天皇に重ね合せたです。それは他の主題と同じく非常に素朴な形で表され、鉄斎の無垢な気持ちが伝わって来ます。そのため絵画としての生命は今なお失われていないのでしょう。

なお、旭山の「登富士山記」には図が伴い、一図は見開き二面にわたる富嶽全景で、もう一図は見開きに富士の頂上部のみを描いた図です。これは鉄斎の代表作として挙げた六曲一双屏風の構成と同じで、鉄斎画の先駆的作品と見ることができ、この点でも興味深いものです。

（藤田伸也）

季刊 美のたより №114
平成８年２月20日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.